

News! the 世界遺産

いざかまくら塾
第3回

世界文化遺産 石見銀山遺跡 登録の経過と未来を語る

6月7日(日)、鎌倉商工会議所地下ホールにおいて、いざかまくらトラストと推進協議会の共催で、2007年に世界文化遺産に登録された石見銀山についての講演会が開かれました。行政の側から登録に携わってきた、島根県大田市教育部長の大國晴雄さんを講師に招き、登録へ向けての取り組みや経緯などを伺いました。伊藤正義さん(いざかまくらトラスト代表・鶴見大学教授)の司会による質疑応答もあり、登録のノウハウや問題点などが語られ、多くの示唆を得ることができました。

(講演要旨)

◎遺跡の概要

大永6年(1526)に本格的に開発された石見銀山は、天文2年(1533)東アジア伝統の灰吹法を応用した精錬技術が導入されて生産量が飛躍的に増加する。産出した大量の銀は、16世紀から17世紀東アジアに流通し、さらにヨーロッパの東アジア進出を促し、東西の文化交流を促進した。銀の産出から搬出までの全体像を示す遺跡が、自然環境と一体となって文化的景観を形成しているところに石見銀山の際だった特色があり、伝統的技術の痕跡、集落、街道、港町、寺院、山城跡など14の資産を数える。しかし、バッファゾーンを含めて2000人程度の人口に過ぎず、ほとんどは遺跡で脆弱な資産である。

◎世界遺産登録まで

1996年以来、世界遺産登録を目指して島根県と大田市が遺跡の全容解明にむけた総合調査を開始、併行して史跡指定の拡大、重要建造物保存地区の選定などを進め、個人住宅にも補助金を拠出して発掘調査と共に建造物の保存に努めた。他方、昭和32年(1957)大森町の全戸加入で文化財保存会が成立、以来、全市民が保護活動に参加してきた。世界遺産登録もそれらの延長線にあるものとして地域住民に受け入れられた。住民生活とのかかわりを持った文化財保護は、遺跡を複層的、複合的に考えることであり、石見銀山の登録は、遺跡と住民との共生を柱として進んだものだ。

◎登録の経緯

2007年5月、イコモスによって、顕著な普遍的価値の証明が不十分という理由で、「登録延期」が勧告されたが、その後、委員会国の代表への説明などの努力が重ねられ、6月にニュージーランドのクライストチャーチで開かれた世界遺産委員会において、「登録延期」



の上のランクである「情報照会」を超えて登録が決定された。登録基準に照らして、銀を通じた文明の交流が基準iiに、遺跡に残る銀生産の技術が基準iiiに、「停止」、「継続」した文化的景観が基準vを満たしていることなどの評価が得られた結果である。応援してくれたのは、前年スウェーデンが登録されたチリやインド、アフリカなどの途上国、そして先進国では日本と通商の歴史の長いオランダであり、これらが突破口となって登録に結びついた。

◎登録後の取り組み

地域住民の誇りとなりつつあるが、登録は地域振興や観光振興を目指したものではなく、住民憲章に明記しているように、「おだやかさと賑わいの両立」を目指している。急増した観光客対策として、駐車場の整備、バスの運行、ハーフボランティアによる史跡の案内や交通整理などで対応しているが、観光客の増加により、宿泊や地元産業に好影響がある一方で、これまでの穏やかな暮らしを乱されたくないという思いもあり、現在、官民組織の石見銀山協働会議による石見銀山行動計画の実現に努力している。

◎講演、質疑応答を通して見えてきた問題点

自然との共生、未来に対しても責任を持つ住民の意識が大切である。他国の同類の文化遺産との比較研究が不可欠で、それを通して顕著で普遍的な価値を説明すべきである。推薦書がイコモスに理解されるよう、ことばのニュアンスまで含めて正確に伝えられること。委員会国でも途上国や先進国との間に評価や考え方にずれがあり、また、文化遺産評価の考え方は相対的、流動的であるため、先行の事例は必ずしも参考とはならない。状況や評価の流れを予見し、情報を入手してそれに対応しなければ登録は難しい。